手の届くしあわせ

手の届くしあわせ

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18827370

ヒュンマ, マァム, ヒュンケル, ロカ, ヒュンマアドベント, ブックサンタ2022, 勇者アバンと獄炎の魔王, ダイの大冒険

クリスマスを待つ期間である、待降節のヒュンマ。
３ページ目が戦後の村くらしです。家族が増えてますので、苦手な方は、ご注意ください。

Twitter上でいきなり立ち上げてしまったクリスマス企画＃ヒュンマアドベントの投稿作品です。
それぞれ、マァムが５歳、１５歳、２５歳頃の１２月のお話です。

2024.3.22　子どもたちの年齢差を微修正

Table of Contents

手の届くしあわせ

　冬の寒さが厳しくなる頃、ネイル村では、生誕祭の準備が始まる。
　神の御子の生誕を祝う生誕祭までの間、村人たちは、毎年、生誕祭当日に備えて、その準備に余念がない。
　それぞれの家では、リースを作って玄関に飾り、教会前の大きな樫の木には、子どもたちが飾りをつける。
　生誕祭に向かう準備期間であるこの待降節、ほかの街や村と同様、ネイル村でも祭りの予感に村全体が浮足立ち、子どもたちも寒さに負けることなく興奮を隠せずにいた。
　樫の木につける飾りは、毎年、村人たちが持ち寄っていた。そのどれもが、村人たちの手作りの品だった。
　手縫いの天使の人形。
　暖かい端切れで作られたソックス、ブーツ。
　木彫りの林檎。
　子どもたちの作った紙の星。
　収穫して保存しておいた林檎。
　森で拾った松ぼっくり。
　それぞれのオーナメントが村の人々や子供たちの手によって、大きな木に飾られてゆき、永遠の命を窺わせる常緑の樫の木に、普段とは異なる彩りを添えていた。
　幼いマァムも、自分で作った紙の星を手に、教会の樫の木の下にやってきていた。
　だが、まだ５歳の彼女には、樫の木の一番下の枝さえも、はるかに手の届かないものであった。
　マァムは、懸命に手を伸ばすが、指先がかすりもしない。
　右手に持った紙の星と、頭上の枝を見比べ、マァムは眉をへの字に曲げた。
　どうしよう、どうやってつけよう。
　幼い彼女がそう思案に暮れていたときだった。
「どうした、マァム。」

穏やかな声が彼女を呼んだ。
　マァムは、振り返ると、ぱっと笑顔になった。
「とうさん。」
　マァムのすぐ後ろには、父親のロカが立っていた。
　マァムは、右手の星をロカに向かって突き出し、困ったように眉を下げた。
「あのね、これ。」
　すると、マァムが言い終わる前に、ロカが気付いたようだった。
「ああ、つけたいのか。
　待ってろ。」
　ロカは、そう言ってしゃがむと、マァムを抱え上げた。
「しっかり捕まってろよ。」
　ロカはそう言って、自分の肩の上にマァムを乗せ、立ち上がった。
　マァムは、ロカの頭の後で父の肩にまたがり、父の頭にしがみついた。
　ロカが立ち上がると、マァムの前に、見たこともない高い目線の、広い世界が広がっていた。
　マァムは歓声を上げた。
「すごい、とうさん！たかいね！！」
「怖くないか？」
「ぜんぜん！
　たのしい！！」
「ほら、これで届くだろう？」
「うん！ありがとう！！」
　ロカは、しっかりとマァムの足を押さえたまま、樫の木に近づいた。マァムが木に触れるように、慎重に足を進める。
　少しすると、ロカの頭上で、がさがさと葉擦れの音がした。
　ロカが視界を上にあげると、マァムが懸命に伸ばしている手が見えた。
　その先の緑に、鮮やかな黄色の星が踊った。
　ロカは娘に尋ねた。
「できたかー？」

「うんっ！！」
　マァムは、勢いよく返事をした。
　ロカは、マァムを肩車したまま木から離れると、マァムとともに、樫の木を眺めた。
　樫の木の下には、マァムと同じ年頃の子どもたちから、もっと年長の子どもたちまで、何人もの村の子たちが集っている。
　それぞれ、オーナメントを手に持ったり、樫の木を見上げたりしていた。
　樫の木には、徐々にオーナメントが増えていき、にぎやかになっていった。
　星の黄、金。
　天使の白。
　林檎の赤。
　さまざまな色が添えられていく。
　そこには、この村の人々の願いの数、幸せの数の分だけ、それぞれ異なる彩りがあり、その中に、マァムのつけた紙の星もあった。
「上手につけられてるじゃないか。
　木がずいぶん綺麗になったなー、マァム。」
「うん！」
　ロカがマァムに声を掛けると、マァムも嬉しそうに答えた。
「もう少し肩車するかー？」
「うん！！」
「よーし、じゃあ、しっかりと捕まっていろよ！！」
「きゃあっ！」
　マァムは、ひしとロカの頭に抱き着き、歓声を上げた。
　そうしているうちに、教会の扉が開いた。
　祖父のアリアムが、建物の中から顔を出す。
　アリアムは、手に籠を持っていた。
　温厚な神父は、子どもたちに呼びかけた。
「お務めご苦労様だね。
　お菓子をどうぞ。」
　その言葉に、わっと子どもたちの歓声が上がった。いっせいに、少年少女たちがアリアムに駆け寄っていく。

アリアムは背をかがめて、子どもたちに１つずつ、籠の中から出したクッキーを渡していった。
「ジンジャークッキーだよ。
　たくさんあるから、慌てなくても大丈夫。」
　すると、ロカの頭の上で、マァムが声を上げた。
「あっ・・・。」
　ロカは、にやりと笑って、マァムに尋ねた。
「マァムも欲しいか？」
「う、うん。」
「よし。」
　ロカは、慎重にマァムを肩から降ろした。
　そして、マァムがしっかりと地面に降りたことを確認すると、ぽんと、娘の背を叩いた。
「じゃあ、行ってこい！」
　マァムは、そのまま、アリアムの元に向かって走り出した。
「おじいちゃーん！！」
　大きく手を振るマァムの前で、アリアムが、孫娘に穏やかな笑みを浮かべていた。

　待降節に入ると、毎年、教会の樫の木にはオーナメントが飾られる。
　１５歳になったマァムは、教会の前で、子どもたちがオーナメントを持ち寄る様子を微笑ましく見守っていた。
　１６歳で成人扱いになるロモスでは、１５歳ともなればほぼ大人である。
　特に、マァムは、同年代の少年少女たちに比べ、身体の成長も早く、腕っぷしも強かったため、すでに村の大人たちからも頼りにされていた。
　この日、樫の木の下に集まっていた子どもたちは、まだ幼い子たちが多かった。
　背丈の低い彼らは、樫の木を見上げて何やら話をしている。
　マァムは、子どもたちに近寄り、声を掛けた。
「どうしたの？」

すると、子どもたちがマァムに駆け寄った。
「あっ、マァム！！」
「マァムちゃーん。」
「お姉ちゃん。」
　駆け寄る子供たちは、どの子も手にオーナメントを持っている。樫の木に飾りつけに来たのだろう。
　子どもたちに囲まれ、マァムは尋ねた。
「飾りに来たの？
　みんな、いいの持ってるわね！」
「うん。」
「でも、届かないの。」
「今日は、お兄ちゃんもおじさんも来てないし。」
「神父様は？」
「忙しいみたい。」
　どうも、樫の木に飾りをつけに来たものの、頼れる大人が誰もおらず、飾れずに困っていたようだった。
　マァムは少し考えると、子どもたちに答えた。
「じゃあ、私がつけてあげる！」
　マァムの言葉に、子どもたちは歓声を上げた。
「本当！？」
「やったー、すごいマァム！！」
「マァムちゃん、ありがとう！」
　マァムは、子どもたちに力強く頷いた。
「待っててね。すぐに梯子持ってくるから！」
　さすがにマァムでも、大樹の下の方にしか手が届かない。
　マァムは、言葉のとおりに、すぐに、教会裏手から梯子を取ってくると、樫の木にかけた。するすると梯子に上っていき、子どもたちのオーナメントを木に飾ってゆく。
　樫の木の下で、子どもたちの歓声があがった。
「すごい、マァム！」
「ありがとうー！！」
　マァムは梯子を往復し、子どもたちからオーナメントを受け取ると、また梯子を上っていき、木に飾っていった。

そうして、彩られた木を見上げながら、マァムは幼い日を思い返した。
—・・・父さんにもしてもらったっけ。
　亡き父を思いながら、今度は自分が子どもたちの願いを叶える立場になったことに、マァムは小さな誇らしさを感じていた。

　ヒュンケルは、幼い息子の手を引きながら、教会前にやってきた。
　すでにそこには何人もの子供たちが集まっていた。
　樫の木にも、いくつもの飾りが付けられており、祝祭の予感を強く覚えさせた。
　もうネイル村に暮らして数年になる彼には、冬の待降節の習慣は馴染みのあるものになっていた。
　ただ、今年は、もうすぐ３歳になる息子が、自分で飾りをつけたいというので、一緒にやってきたのだ。
　昨夜、ヒュンケルが教えて一緒に作った紙の星を手に、幼い息子は、きらきらとした目で、普段とは異なる装いを見せた樫の木を見上げていた。
　幼い少年は、父を見上げて尋ねた。木のてっぺんを小さな指で指し示す。
「とうさん、あそこにつける？」
「ああ。だが、届かないだろう？
　自分でつけたいんだったな。」
「うん。」
　息子が頷くと、ヒュンケルは、膝をついてしゃがんだ。まだ小さな息子を肩に乗せ、立ち上がった。
　ヒュンケルの頭上で、歓声が上がった。
「うわっ！すごーい！」
「怖くないか？」
「だいじょーぶ！」
　物怖じしない息子に微笑ましく思いながら、こんなところはマァムに似ているなとヒュンケルは思った。
　ヒュンケルは、息子を肩車したまま樫の木に近づいた。

「つけられるか？」
「うん・・・。」
　しばらくガザガサと音がしていたが、やがて、嬉しそうな声が上がった。
「できたー！」
　その明るい声に、ヒュンケルも喜色を浮かべた。
　彼の足元で、他の子たちの声が聞こえる。
「あー、いいなー。」
「ヒュンケル、すごいー。」
　彼が息子を肩から降ろすと、子どもたちが駆け寄ってきた。
「ヒュンケルー、ぼくも―。」
「つけるー。乗せて。」
「届かないー。」
　どうやら、樫の木を飾りたいのだが、木に届かないらしい。
　ヒュンケルは苦笑して、子どもたちに答えた。
「わかった。順番だぞ。」
「やったー！」
　子どもたちの歓声が上がった。
　ヒュンケルは、ひとりずつ、子どもたちを抱き上げると、樫の木に近付き、子どもたちにオーナメントを飾らせていった。
　子どもたちの一人が、ヒュンケルに尋ねた。
「肩は？」
「肩は危ないからな。抱っこでも届くだろう？」
「うん。」
　そうして、数人の子どもたちを順番に抱き上げて、オーナメントを飾らせた。
　子どもたちの作業がすっかり終わると、ヒュンケルは、近くで、不満げな色を浮かべる我が子を見つけた。
　彼は子どもたちがオーナメントを飾り終わったのを見届けると、待ちかねたかのように、父に駆け寄った。
「とうさん！」
　そうして、幼子はヒュンケルに抱き着いた。
　ヒュンケルもまた、息子を抱きしめ返し、そっと声を掛けた。

「待たせたな。終わったよ。」
　息子は、ヒュンケルに抱き着いたまま、背をかがめた父の腹に顔を埋め、うなずいた。
　ヒュンケルは、彼に声を掛けた。
「また乗るか？」
　幼い少年は、黙ったまま頷いた。
　ヒュンケルは、息子を抱き上げると、先ほどと同じように、彼を肩に乗せた。
　そして、ふたりで、祝祭に彩られた樫の木を見上げ、言葉を交わした。
「綺麗になったな。」
「うん。」
「よく我慢したな。」
「・・・うん。」
「肩車は、お前だけだ。」
「・・・とうさん、だいすき！」
　そんな父子の後姿を、赤子を抱いたマァムが見つめていた。
　マァムは、夫に呼びかけた。
「ヒュンケル。」
　息子を肩車したまま、ヒュンケルが振り返る。
　マァムは、まだ誕生日を一度も迎えていない娘を抱きながら、息子に声を掛けた。
「いいわね！肩車。私も父さんによくしてもらったわ！」
「へへ～。」
　母の言葉に、息子は自慢げに微笑んだ。
　マァムは、夫の隣に並ぶと、彼を見上げて、礼を述べた。
「ヒュンケル、ありがとう。
　ほかの子たちも喜んでるわ。」
「いや、このくらい。」
　マァムは、村人たちの願いを乗せた樫の木を見上げながら、幼い頃の記憶に思いを馳せた。
「私が小さい頃もね、父さんに肩車してもらって飾りつけしたの・・・。

いつの間にか、私の方がしてあげる側になってて。
　何年か前からは、私がはしごをかけて、子どもたちのかざりを木につけてあげてたのよ。」
「お前らしいな。」
「嬉しくってね。
　私がしてもらってたことを子どもたちにもしてあげたいって・・・。
　そうしたら、ヒュンケルもそうしてくれた。
　父さんが私にしてくれたように、ヒュンケルもそうしてくれている。
　それが嬉しいの。
　ありがとう。」
　そう言って微笑む妻を直視できず、ヒュンケルは、樫の木に視線を送ったまま、ぽつりとつぶやいた。
「・・・もどかしいな。」
「え？なにが？」
「お前も抱きしめたいのに、手がふさがっている。」
　マァムは、一瞬、驚いたように目を見開いたが、すぐに事態を飲み込むと、噴き出した。
　ヒュンケルは、肩車をした息子の足を両手で支えていた。
　一方のマァムも、まだ乳飲み子の娘を両手で抱きかかえていたのだ。
「本当！私もよ。」
　すると、困ったように、肩の上の息子が、おずおずと尋ねて来た。
「・・・とうさん、ぼく、おりる？」
　父の肩から降りたほうがいいのかを聞いてくる。その幼い心遣いに、マァムは笑みを浮かべた。
「もう、そんなの気にしないの！」
「ああ、お前は気にしないでいい。」
　両親が口々に、そう言って彼を引き留める。
　マァムは、ほんの少し首を傾け、ヒュンケルの肩に、自分の額を押し付けた。

「こうするから、いい。」
「マァム。」
　そんな妻の仕草を、ヒュンケルは愛おし気に見つめていた。
　しばらくそうしていただろうか。
　ヒュンケルの肩の上から、幼い少年の遠慮がちな声が響いた。
「とうさん、かあさん。
　・・・おわった？」
　見ると、彼は、精いっぱいマァムから首を背け、母の方を見ないようにしていた。その頬は、紅をさしたように色づいている。
　ヒュンケルとマァムは顔を見合わせた。同時に苦笑する。
「困らせちゃったみたいね。」
「そうだな。」
　ヒュンケルは、頭上の息子に呼びかけた。
「すまなかったな。そろそろ帰るか。
　寒いだろう。」
「そうね。あったかい林檎のドリンク、作りましょうか。
　ジンジャークッキーも残ってたわね。」
「やったー！」
　ヒュンケルの頭上で、幼い少年の歓声が上がった。

　鮮やかなオーナメントに彩られた教会の樫の木は、若い家族を温かく見守っていた。
　彼らの行く末に、幸多くあらんことを、と。